

## 視点(886)

### 年齢と活齡と能力について!!

日本の近未来は熟年化が進み、少子高齢社会になりつつあります。2005年と2020年の日本の年齢別人口予測は次の通りです(国立社会保障・人口問題研究所調べ)。

	年齢の幅		2005年	2010年	2015年	2020年	増減ポイント	増減率
シルバー層	75歳以上	15歳	9.2%	11.0%	13.1%	15.4%	+6.2	+67.4%
シニア層	60~74歳	15歳	17.7%	19.9%	20.6%	19.9%	+2.2	+12.4%
ミドルアダルト層	45~59歳	15歳	20.8%	19.1%	19.2%	21.1%	+0.3	+1.4%
ヤングアダルト層	30~44歳	15歳	20.9%	21.1%	20.2%	18.2%	-2.7	-12.9%
ジュニア・ヤング層	15~29歳	15歳	17.6%	15.9%	15.1%	14.7%	-2.9	-16.5%
ベビー・キッズ層	0~14歳	15歳	13.8%	13.0%	11.8%	10.7%	-3.1	-22.5%
合計		90歳	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%		

確かに、年齢で見ると上記の通りであり、このままでは日本全体が徐々に老齡化しますが、年齢ではなく「活齡」(能力として活躍できる年代)で見ると、よく言われる言葉で「老人は昔に比べて15~20歳は若返っている」があります。すなわち、昔の40歳は今の60歳、あるいは、昔の60歳は今の80歳と同じ活齡という意味です。

もっともっと、年齢ではなく活齡で能力を発揮する仕組みを個人的かつ社会的に確立することが、日本の国の活力を保つために必要です。

そこで、人間としての「活齡」を能力別に未来志向を基に概念化すると、次の通りです。

働く人のタイプ	能力のタイプ	昔は(過去)	今は(現在)	今後は(未来)
スポーツ選手	体力	18歳~35歳 (17年間)	18歳~40歳 (+5歳)	18歳~45歳 (さらに+5歳)
サラリーマン (OL)	才能	18歳~55歳 (37年間)	18歳~60歳 (+5歳)	18歳~70歳 (さらに+10歳)
研究者	頭脳	23歳~65歳 (42年間)	23歳~70歳 (+5歳)	23歳~85歳 (さらに+15歳)
生活者	感性	18歳~55歳 (37年間)	15歳~65歳 (+13歳)	12歳~80歳 (さらに+18歳)

スポーツ選手(体力を基軸とする能力)は過去は35歳までが活力ある年齢(活齡)でしたが、現在は40歳まで活力ある年齢に延びました。サラリーマン(才能を基軸とする能力)は過去は55歳までが活力ある年齢でしたが、現在は60歳まで活力ある年齢に延びました。研究者(頭脳を基軸とする能力)は過去は65歳までが活力ある年齢でしたが、現在は70歳まで活力ある年齢に延びました。スポーツ選手やサラリーマンや研究者の活力ある年齢が過去に比べて現在は5歳延びたのは、栄養等による体力的な面での活性化ですが、今後は、頭力の創意工夫による活性化が必要です。今、多くの分野で活齡を創意工夫によって延ばしています。年を取ると頭脳は新たな情報収集能力は低下しますが、逆に、脳の中にある情報のネットワークは活発化するそうです(これを年の功と表現されています)。今は、スポーツ選手は45歳まで十分に活躍できる人が増えつつあり、サラリーマンも70歳まで才能的に十分に活躍できる人が増えつつあり、また、研究者は85歳まで知的頭脳を発揮する人が増えています。この現象は、新たなノウハウの確立ではなく、現在持っているノウハウの活用によって成し遂げられるのです。野球の選手で言えば、外野フライを打てるパワーがあれば打撃の創意工夫でホームランにすることができます。また、一定の早さで内野ゴロを打てるパワーがあれば、打撃の創意工夫でヒットにすることができます。このように、新たなパワーアップをしなくても、打撃の創意工夫によりホームランやヒットを打つことができることを「創意工夫による活力年齢の延長」と言います(六車流：流通理論)。熟年大国「日本」を確立するためには、活力年齢(活齡)を延ばすことが必要です。